

## 「麦が変えたナイルと人との関わり ―農耕の開始と定着―」

高宮 いづみ

### はじめに

ナイル川と人間との間には様々な関わりがあり、その関わりは、環境、生業、文化、社会、あるいは技術などによって異なるであろう。その中でも生業を通じた関わりは、生活全般に影響を与え人々のナイル観を大きく左右することになったと思われる。

今から500万年前頃に始まった長い人類史の大半の間、人間は狩猟、採集、漁労を生業としていたが、ようやく1万年前頃に西アジアの一角で農耕・牧畜が始まり、生産経済に基盤を置いた文明社会の急速な発展を促すことになった。ナイル川下流域においても、前6千年紀の終わりに農耕・牧畜が始まった。そして、麦の栽培を中心とする農耕の始まりは、農耕に依存する生活様式の確立とともに、それまでのナイルと人との関わりを大きく変容させた。ここでは、農耕の成立期から古代エジプト王朝時代にかけて、麦がいかにナイルと人間とを特殊な関係で結びつけ、それが人々の生活の根幹を形成してきたかについて見てみたい。

### 農耕の始まり

今日砂漠が凌駕するアフリカ大陸北東部は、数万年という長い時間の単位で見ると、何度か大きな環境変化に見舞われている。今から約3万3千年前に始まった後期旧石器時代には、現在のように乾燥した気候で、気温は現在よりもやや低かったという。大きく砂漠が広がる環境の中で、当時の人々は水の豊富なナイル川のほとりに集まって生活しており、この頃の遺跡はナイル川の流域で多数検出されている。狩猟・採集・漁労を生業とする中でも、ナイル川周辺の湿地に生育するナツグラスなどの根茎類が当時の人々の主要な食糧であり、水鳥や魚類と貝などの水産資源が、比較的安定した生活をもたらしていたらしい。

しかし、今から1万年あまり前になると、この地域一帯に湿潤期が訪れた。主に赤道アフリカを覆っていたモンスーンを伴う降雨帯が北上したことによって、サハラ砂漠の南部に少量の季節的な降雨が見られるようになった。降雨後には、一時的に低地に湖沼あるいは水たまりが出現し、周囲の砂漠

もステップあるいはサバナのような景観に姿を変えたという。この湿潤期の中に、人々は生活領域を現在の砂漠地帯の中にまで広げていった。この時期は考古学的に終末期旧石器時代と呼ばれ、狩猟・採集を営む人々の間で、土器の使用も始まった。

アフリカ大陸北東部最古の農耕や牧畜が始まったとされるのは、この湿潤期の中に形成された遺跡においてであった。砂漠地帯に出現した湖沼あるいは水たまりの近辺で、植物の栽培と家畜の飼育が始まった可能性がある。ナプタ・プラヤなどの前7世紀頃に年代付けられる遺跡において、牛の家畜化や麦の栽培が始まったと言われる。ただし、これまでのところ、これらの遺跡において確実な栽培植物の出土例はなく、植物が栽培されていたとしても、それはかつて主張されていた麦ではなく、ソルガムのような夏の降雨に適して生育するアフリカ原産の雑穀類であった可能性も指摘されている。仮に、この時期に植物栽培が行われていたとしたら、それはいわゆる天水農耕であった。

### ナイル河畔における農耕の定着

前6千年紀頃になると、アフリカ大陸北東部の気候は、再び乾燥化に向かい、ナイル川の西方は、再び植物の生えない砂漠に戻っていった。この環境変化の中で、ナイル川西方にあった湖沼や水たまりは消失あるいは縮小し、遺跡形成も不活発になった。一方、前6千年紀の終わりから、ナイル川の下流域に、農耕・牧畜を生業とする人々が住み着き始めた。おそらく、水を求めて人々がナイルのほとりに集まってきたためであろう。

ナイル川下流域最古の農耕・牧畜を持つ遺跡は、エジプト北部のファイユームとメリムダ・パニ・サラマで検出されている。大麦、小麦、エンマー小麦、亜麻といった植物が栽培され、牛、羊、山羊、豚の家畜が飼育されていたことが知られている。

初期の農耕は、狩猟や採集や漁労に補完されて成り立っていたが、その後約1千年の間に、麦の栽培に生業の中心を置く人々の集落がナイル川下流域の広い範囲に普及していき、前4千年紀の始まり頃には、あちこちに農耕村落が定着していた。

## 王朝時代のナイル川と農業

ナイル川下流域に定着し、王朝時代以降近年まで継続した農耕は、アフリカ大陸北東部最古の農耕が天水農耕であったのとは対照的に農業用水を完全にナイル川に依存していることが特徴である。したがってナイル川下流域の農耕はナイル川の独特な増水システムとその季節性に大きく影響されていた。

ナイル川の下流域は、地中海沿岸部を除けば基本的に砂漠気候であり、北半球に位置するため、夏至頃に暑く、冬至頃には寒い。しかし、赤道地帯に水源を持つナイル川は、下流域の季節とは別の季節性を持っていた。それは、赤道地帯の雨季と乾季に対応する流水量の著しい変化が作り出す季節である。

ナイル川は、地中海に注ぐ河口部からは遙か離れた赤道地帯に近い地域に水源を持つ。砂漠気候の下流域とは異なり、水源地帯のタンザニア、エチオピア、スーダン付近にはモンスーンがあり、夏に降雨が集中した。ナイル川に注ぎ込む主な支流には、ビクトリア湖に水源を発する白ナイル、タナ湖に水源を持つ青ナイル、タナ湖の北方に水源を持つアトバラ川があるが、このうち特に青ナイルとアトバラ川は、雨季の降水を集めて、夏季に多量の水をナイル川に注ぎ込んだ。このため、ナイル川の最下流にあたるエジプトでは、毎年夏季に著しい増水が起こることになった。

エジプトでは毎年、6月からナイル川の水位が上昇し始め、9月頃に最高の水位を迎えた後、11月にもとの水位に戻る現象を繰り返した。増水の水位は年によって異なるが、増水にともなってナイル川の川幅も大きく広がった。冬季のナイル川は1?2 kmの川幅を持つ比較的細い川であったが、増水時には10?20kmの大河となった。増水時に冠水した沖積低地は、水が引くと耕作地に変貌する。ナイルがもたらした水が大地を潤し、かつ土壌の塩分を洗い流したうえ、上流から運ばれた沃土が耕作地に養分を与えた。幸いなことに、ナイル川が増水の季節性は冬小麦の生育にタイミングが合っており、古代以来、エジプトの人々は増水の後、この肥沃な沖積低地に麦の種を播いて豊かな実りを享受したのである。

## 暦と生活

古代以来、麦を主食としていたエジプトの人々の生活は、このナイル川に合わせた農業を基本として営まれていた。古代エジプトの暦は1年を365日に数える太陽暦であり、ナイル川が増水を1年の始ま

りとして、農業に合わせた3つの季節に分けられていた。最初の4ヶ月は「アケト(増水季)」と呼ばれ、ナイル川が増水している間の農閑期にあたる。次の4ヶ月は「ベレト(播種季)」と呼ばれ、増水後の沖積低地に麦の種を播いて、生育を待つ季節であった。最後の4ヶ月は「シエムウ(収穫季)」と呼ばれ、収穫とその後処理作業の季節である。暦と実際の季節の間にはずれがあったが、実生活の一年は、ナイル川と麦の栽培に合わせて回っていたであろう。

概してナイルのほとは農業にとって恵まれた環境であったものの、増水の水位によって、麦の収穫量は大きく変動を余儀なくされることも特徴であった。増水時の水位が低いと、耕作地に十分水が行き渡らず、収穫の低下に直結した。一方、異常に高い水位は、沖積堤防や低位砂漠の縁辺部に形成された集落を冠水させて、住居や諸施設に被害をもたらしただけでなく、しばしば疫病の蔓延に繋がり、播種の遅れはやはり収穫量の減少を引き起こした。そこで人々は、毎年適切な水位の増水が来ることを祈り、紀元前3100年という古い時代から、増水時の水位を記録し続けたのである。

ナイル川下流域では、古くから「貯留式灌漑」と呼ばれる灌漑が行われていた。運河と堤防を築いて、方形に区切った耕作地に増水の水を蓄え、減水時に放出することによって、人工的に収穫量を増加させることができた。アスワン・ハイダムが完全に機能するようになり、増水が起こらなくなった1960年代まで行われていたこの灌漑も、基本的にはナイル川が増水システムを利用したものである。

## おわりに

人類の歴史を振り返ると、ナイル川と人との関わりは、狩猟、採集、漁労を通しての期間の方が長かった。しかし、一旦麦の栽培が主要生業となって以降は、ナイル川は何よりもまず麦の栽培と収穫を通じて人々に影響を与える側面が強く認識されるようになったと思われる。狩猟、採集、漁労を営む人々によっても、ナイルは重要な恵みの源であったが、その関わり方の違いゆえに、それぞれのナイル観もおそらく異なる。農耕の定着以来、人々がナイル川が増水量に寄せた関心は、麦あってこそのものであり、この麦を通じての特殊な関係が、古代以来のエジプトを中心とするナイル川最下流域で認識されるナイル観の根底を成してきたと言えるであろう。

(たかみや いづみ 近畿大学)